

# しろね図書館だより

No. 92

発行 新潟市立白根図書館  
平成20年1月1日

❖ 1月の展示架テーマ 「おうちで楽しむ」

## 子

新年おめでとうございます。

新しい年、2008年のスタートです。十二支も一周して子(ね)に戻りました。十二支はもともと古代中国で考えられ、日本に伝わったもので、日本ではこの十二支にそれぞれ動物の鼠・牛・虎・兎・龍・蛇・馬・羊・猿・鶏・犬・猪の12の動物が当てられています。しかし、国が違えば文化も違うように、当てられている動物もすこしずつ違ってきます。牛が水牛であったり、兎が猫であったり、最後が猪というのはまれでほとんどは豚とされています。

中国ではじまり、アジアには広くこの十二支という考えが広まっていますが、ごく一部の東ヨーロッパを除いて、西洋にはこのような考えはありません。

さて、みなさん今年は何んな年にしましょう。

しろね図書館では、新年早々に講演会を開催します！講師は彫刻家で絵本作家でもある新宮晋さんをお迎えし、自然のすばらしさについて話していただきます。みなさんお誘いあわせのうえご来場ください。

## 新宮晋氏講演会

### 「すてきな地球 すてきな自然」

日時 2008年1月12日(土)

13:30から(開場13:00)

会場 白根学習館 ラスパックホール

※入場無料

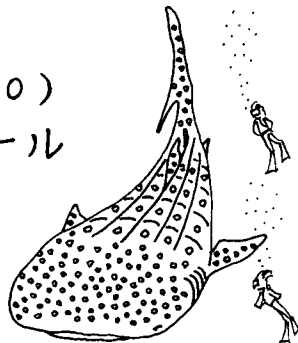
主な作品 「いちご」、「くも」(文化出版局)

「じんばえぎめ」(扶桑社)

「小さな池」、「風の星」(福音館書店)

以上絵本。その他「Shinguv-自然のリズム-」「WIND-CARAVAN」(グリーンセンター)など。

主催：新潟市立白根図書館 後援：しろね図書館友の会  
025-372-5510



## 子どもたちといっしょに 「ねずみくんのチョコッキ」

作・ながえよしお 絵・上野紀子 (ポプラ社)

おかあさんが編んでくれた赤いチョコッキ。ねずみくんがうれしそうにしているとおひるがやってきて「ちよっと させてよ」というものだから、貸してあげます。ところがあひるにはすこしきつそうです。するとそこへさるがやってきて、また同じことをいいます。でも、さるにもすこしきつそう。だって、ねずみくんにぴったりに作られたチョコッキなんですもの。またそこへあしががやってきて、こんどはらいおんがやってきて…と、動物たちはつぎつぎにねずみくんの赤いチョコッキを着てみます。いろんな動物たちに着られて、最初はねずみくんにぴったり似合っていたはずのチョコッキもデレ〜ンと伸びてしまいました。伸びてしまったチョコッキを着たねずみくんはすごく悲しそうです。でも、最後の絵には楽しそうにしているねずみくんがいます。いったいどうしてでしょう。

永く子どもたちに愛されている絵本です。シリーズは24巻を数え、親子2代で読んでいる家庭も多いはず。どうぞ楽しんでください。

第87回読書会 「溢れる春」 津島佑子 著 (新潮社)

1月20日(日) 午後2:00～ 場所：白根学習館 ルーム2

春は、あたたかいやさしいイメージなのに、怖れ恐ろせる季節にしかならない。

### 1月の行事

5	(土) おはなし会 3:00～
9	(水) 絵本のじかん 3:00～
12	(土) おはなしがけ会 10:00～ おはなし会 3:00～ 新宮晋氏講演会*
16	(水) 第85回あかちゃんかほじあそびであらほん 3:00～ 絵本のじかん
19	(土) おはなし会 3:00～
20	(日) 第87回読書会 2:00～
23	(水) 絵本のじかん 3:00～
25	(金) 雑誌リサイクル
26	(土) おはなしがけ会 10:00～ おはなし会 3:00～
30	(水) 絵本のじかん 3:00～

※ 降雪期のため  
BMは連休します

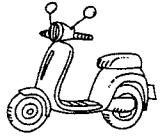
中年女性カズミにつきまとっている死の予感、不安、幻想。そして、そこから抜けだそうとするまでの心の動き。作者の津島佑子(本名：里子)さんは、現在も多くのの人に読まれている戦後の作家、太宰治(本名：津島修治)の次女。

### 12月の

来館者 ----- 14,429人 (視察・見学20人含)  
貸出冊数 ----- 13,775冊  
予約件数 ----- 239件

### 予約ランキング (しばらくお待ち下さい)

- 1位 ホームレス中学生 (19名)
- 2位 ダイニング・アイ (7名)
- 3位 女性の品格  
鈍感力
- 4位 楽園上下 (6名)  
君空 (3名) 他



# 「越後のBaちゃんベトナムへ行く」

小松みゆき 著 (2B企画)  
一般 915.6コ

最初、この本を手にとったとき旅行記かそんなところかなと思っていましたが、まったくどうしてそんな単純な読み物ではありませんでした。あそこに行って、こんな経験をしたとか、ここではこんなものがおもしろかったとかそういったものとはまったく別の読み物で、良い意味で裏切られてしまいました。手に取ったのもただタイトルに惹かれたからで、この本に出会ったのは本当に偶然でした。でも偶然手に取った本でも、読んでみると良い本はたくさんありますよね。

「ばあちゃん」も「Baちゃん」で、なんとなくハイカラな感じがしますね。読み終えたとき「親子の情ってこんなにも深いものなのか」と改めて思い知らされました。

作者の小松さんは母親を連れてベトナムへ渡った。2001年の暮れのことだ。荷物は紙おむつだけ。母親の須田ヒロさんは当時80歳で要介護3と認定された認知症。そんな母親をベトナムに連れて行こうなんてとても勇気がいることです。ベトナムで日本語を教えているとは言え、認知症のおばあちゃんを連れてふたりで暮らすなんてかなりのおもいきりと度胸がないとできない。「それしか方法がなかったのサ」と小松さんはあっけらかんと言っているが、実際問題ベトナムと日本じゃ気候も言葉も違うし、Baちゃんにとって知り合いは娘の小松さんだけだし、しかも認知症でひとりきりにはしておけないし、問題は山積だったであろう。それでも、ベトナムに連れて行ったのは、ただただ「一緒にいたい」「母親を幸せにしよう」という思いがなによりも強かったからなのだと思う。もし自分が小松さんのような立場だったらと考えると、決して同じことはできないと思います。みなさんならどうでしょうか。

周りからの同意もなかなか得られないまま半ば強引に連れて行った形となってしまったらしいが、現地に行ったらなかなか上手く生活しているように見えました。ベトナムの生活もBaちゃんには合っていたみたいだし、現地の友人や日本人、たくさんの方が助けてくれもしたみたいです。周りの人に感謝しても感謝しきれないような気持ちもうかがえる。しかし、実際には2年くらいノイローゼになってしまったそうです。

一時帰国されたときに地元の新聞の取材で「孝行するのが遅くなったけど『生きていてくれてありがとう』と語っていたのがとても印象的だった。

本の中には認知症であるにも係わらず、ベトナムへ連れてきたこと。親類からは非難されてしまったことが細かく描かれているが、本当はもっともっというろいろなできごとや想いがあつただろう。でも、きっと一日一日が楽しくて仕様がなくなってしまうのは、きっと小松さん自身がそう思って暮らしていて、この本を書いたからだろう。

どこかで聞いたようなセリフだがやっぱり「親子は一緒にでなきゃだめ」ですね。

【司書 小林友治】

## 第86回 読書会

平成19年12月16日(日)  
午後2時

### 『狐笛のかなた』

(理論社)  
上橋 菜穂子 著



#### 【おひょう】

人の思いが聞こえる(聞き耳)の力を持つ娘、《小夜》が幼い日に助けた子狐は、《あわい》に生まれ、《あわい》の呪言に命を握られ《使い》として生きる靈狐、《野火》であった。そして、野火を助けたその日、小夜は森林陰屋敷に閉じ込められている少年、《小春丸》と出会う。出会いは三年の歳月が過ぎ、彼らは、隣り合ったまま、過去の因縁と呪いの渦に巻き込まれていく。果たして彼らの運命は...

#### 【参加者感想】

- ◇ あまり読んだことのないタイプの小説だったので、読み始めはなかなか物語に入りづらかったが、読み進んでいくうちにどんどん物語に引き込まれ、おもしろくなっていった。
- ◇ 和製ファンタジーというか、独特な感じの小説だった。靈狐や、聞き耳、あわい、呪者などは、最初どんなものが想像しにくかった。特にあわいは感じがつかぬ、三途の川のような場所じゃないかと、勝手に想像した。
- ◇ 物語の中では国と国との争い、そして土地の奪い合いなどで、多くの人たちの運命を巻き込んでいったが、それはいつの時代も変わらなくて、今も世界では同じ事を繰り返していると感じた。
- ◇ 最後、小夜が急に靈狐に変わるのではなくて、時間を与えてもらって、子どもを持つ人間の幸せを得てから、だんだんと靈狐になっていくのがいいなと思った。殺伐とした話の中の救いに感じられた。
- ◇ 狐である野火の中に人間のような気持ちが現れた。小夜のやさしさに触れて、人間性が出てきたのかと思う。野火は本当に勇気のある子だし、小夜に対する一途で純粋な気持ちに心打たれた。
- ◇ 呪者を使つての戦いは全く想像がつかないが、今でも占いを信じて頼っている人はいるだろうし、そう考えるとありえないことではないのかもしれない。

次回の読書会  
1月20日(日) 午後2時から

『溢れる春』 (新潮社)

津島 佑子 著

読書会とは、参加者が同じ本を読んでお互いを感じたこと、思ったことを自由に話し合う会です。本は、図書館力ウンターで貸出ししています。どなたでもお気軽にご参加ください。

(齊藤久美子)